

雨が降っても溶けない自分の“分身”作り あかみ幼稚園（栃木県佐野市）

【5歳児】

<活動の背景>

環境の整備・構成

・園庭の一角には、穴窯（愛称「焼けたろう」）があり、薪が積んである窯場は、子どもにとっても大人にとっても、“何かを作り出す”雰囲気を漂わせたシンボリックな環境となっている。

・どろ粘土で自分の“分身”作りをすることは平成6年から行われており、歴代の“分身”が園内に点在しているので、子どもたちはそれらを日常的に目にしている。

時には、兄弟関係もあり、「これ、お兄ちゃんのだ」ということを、子ども同士で話題にしている姿も見られた。



園内にある穴窯
（愛称「焼けたろう」）
耐火レンガ約 2,000
丁を使って、園長・職
員・泥工房（でくのぼ
う：地域の焼き物サー
クル）のメンバーが建
設した穴窯である。平
成年に初代が築窯さ
れ、現在のものは平成
14年に改造された二
代目である。

どろ粘土遊び

・3歳児の時から、どろ粘土で遊ぶ経験を重ねる。当初は何かを作るというのではなく、どろ粘土の感触を身体で味わうという活動を十分行う。[例えば、手で触っていると乾燥して硬くなる ポロポロになる、逆に水を加えるとツルツルになる ベトベトになる、といったどろ粘土という素材の性質を感じて遊び、このことがその後の造形活動に生きる]また、この活動は子どもたちを解放的にし、潜在的に持っている活動意欲を引き出す。

・4歳児は「丸める、伸ばす、つぶす、ちぎる、つまみ出す、ひねる、穴をあける、積み上げる」といった遊び方を楽しめるようになる。次第に造形的になっていく。作業を通して、どろ粘土の可塑性に関することを遊びの中で技術的に学んでいく。

・5歳児は「どろ粘土を戸外でそのままにしておくと降雨で溶けてしまうが、窯で焼成すると降雨に耐え得る物になるということを経験や環境から知っている。そして、自分たちも小学生になるとばらばらになってしまうので、“分身”を作りたいという思いを強くもつ。

<活動の流れ>

どろ粘土を使った自分たちの“分身”
作り = 自分自身を作る

足で立つ

服を着ている、帽子をかぶっている
（かぶっている子どものみ）

...技術的に求められること。

どろ粘土を使った自分たちの“分身”が破裂しないために、身体の内側に丸めた新聞紙を入れる（焼成後、新聞紙は灰になり、内部が空洞になり、破裂のリスクを減らすことができる）

造形の際に貼り付けたもの（例えば、目、鼻、口、髪の毛など）が剥がれてしまうことを避けるため、“ドベ”（どろ粘土を水でトロトロに溶いたもの）を使用する

窯詰め

...十分に乾燥させた自分たちの“分身”
を持ち、一人ひとりが窯に入り、園
長と一緒に窯詰めを行う。

（時には“分身”を強く持ってしま

うことで破損させてしまい、乾燥したどろ粘土が特にもろいということを感じる）

火入れ

...5歳児クラス（年長組）全員で集まり、「よく焼けますように！」と、火の“神様”にお願いする。藁から移された小さな火がたき付けに移され、やがてその火が薪に移り、炎が燃え上がると、子どもたちからは、「3日間どうやって火を燃やし続けるのか？」「1,000度を超える温度とは？」「最後に火を止めるというのは、どうすることなのか？」など、様々な疑問が出された。

窯たき

...金曜日から月曜日までの窯たき中、たくさん子どもたちが、週末の夜に保護者とともに窯場を訪れる。窯たきも後半になると、窯の温度も1,000度以上に達し、たき口で燃えている薪の炎が煙道、そして煙突の先



子どもたちの“分身”作りは、自分を寝かせた状態で作られていく。子どもたちは、“分身”を破裂させないために、内部に丸めた新聞紙を入れ、“ドベ”を使用（貼り付けた目、鼻、口、髪の毛などが剥がれてしまうことを避けるために）し、理想的な自分を作っていく。例えば、女の子の一部は、イメージどおりの細くて長い足を好んでつけていた。それらがほぼ例外なくすべて水平方向で平面的に作られていく（寝かせた状態で作られていく）自分と同じように“分身”を立たせなければならない子どもたちは、足を太くしたり、大きな靴をはかせたり、などの作り直しを余儀なくされた。これは、重心の位置を変えなければならないということである。せっかく作った理想の“分身”は、何度も試みては作業台に打ちつけられ作り直される。



端まで走り、窯側面のくべ口から見ると、炎が窯の内部を走る様子がわかる。子どもたちは、「火の川だ!」、「火が運動会をしている!」などのように、驚きを表現していた。また、窯の上部にフライパンを置き、ピザを焼く様子を見るなどして、「1,000度を超える温度」というものを体験していた。



火止め

…月曜日、いよいよ窯たき最終日、攻めだき、そして火止めをする。

再び5歳児クラス(年長組)全員が集まり、大量の薪がくべられると、煙道のダンパー、そして側面のくべ口が順に閉じられた。行き場を失った炎が、正面のたき口や側面のくべ口から一気に噴出し始めると、子どもたちから歓声が上がった。「それでは、火を止めます」という一声で、園長がたき口を耐火モルタルと耐火レンガで塞ぐと、酸素を失った窯の内部から硫黄臭に似た独特の臭いが流れた。子どもたちは、「臭い!」、「ホースで水をかけて火を消すんじゃないかな?」、「火を閉じ込めちゃうんだ」、「焼けたろうが(熱で)ユラユラしている」など、思ったことを興奮気味にどんどん言葉にしていた。

窯出し

…一週間後、再び5歳児クラス(年長組)全員が集まり、窯出しを行った。

火止めの際に塞いだたき口をハンマーで開けると、子どもたちの気持と視線が集中するのを感じた。実際の窯出し作業に入る前、投光機を使ってたき口から焼成室を覗いた子どもたちを最も驚かせたのは、大量にくべられた薪がほんの僅かな灰になってしまっていた、ということであった。



続いて自分たちの“分身”が出てくると、「硬くなってる」

「色が変わってる」などの声が上がっていた。

焼けたろうで焼くと、色が変わって、硬くなって、冷たくなって、雨が降っても溶けなくなるんだ

<考察>「科学する心」に関わると思われる子どもの姿

どろ粘土が陶質を得るということ

・「作った自分の“分身”が降雨で溶けてしまうことを避ける」ということは、「そこで生じる問題の解決を自ら“必然”と感じ、模索する」という姿につながった。子どもたちの「科学する心」の発生・熟成にとって大変重要な契機であった。

・“分身”の製作において技術的に求められた、「内部に丸めた新聞紙を入れる」ということ(“分身”の内部を中空にして破裂を避けるため)さらに「目、鼻、口、髪の毛などの接着の際に“ドベ”(どろ粘土を水でトロトロに溶いたもの)を使用する(接着物の剥離を防ぐため)」といったことから、子どもたちはどろ粘土の性質を知ることになった。

重心とバランス

・自分と同じように“分身”を立たせなければならない子どもたちは、足を太くしたり、大きな靴をはかせたりするなどの、作り直しを余儀なくされた。これは、重心の位置を変えなければならないということである。

・子どもたちはバランスに関する問題を感じ、胴体に取り付ける足の位置や角度に注意を払うようになる。取り付けられる首の位置と角度がバランスに大きく関与していることや、靴の裏側を平らにすることを、子どもたちは発見していった。



みどころ

「子どもたちが自分の“分身”を作り、園庭に置いていきたい」という思いを強くもつ環境にあること、その思いに応える環境もあり、そのための様々な泥粘土や必要な教材が整備されていることが分かります。

そして保育者は、子どもたちが「理想の自分・立つ自分・降雨に耐える“分身”」を作るために意欲的に取り組み、「何度も何度も作っては試し、壊しては作り直す」姿を、支え見守りながら「科学する心」が育まれていく過程を的確にとらえ、獲得している内容を考察しています。